



ひろばサークル「彩の会」で、北馬場の北野貞子さんは十五年程前から七宝焼き造りに取り組んでいます。

北野さんが始めたたきつけは手作りです。仕上がりが華麗な色彩に富む七宝焼きに魅せられたこと、ひろばサークルに彩の会があり、和やかな雰囲気、会員と細かい手作業をしながらも他愛ないおしゃべりが楽しめたことでした。

今は、ふれ愛まつりに出す作品作りに一生懸命です。七宝焼きは古代ローマからシルクロードを通じて古墳時代に日本に伝えられたとされる工芸で、様々な人たちの創意工夫で明治時代には壺や香炉に施され、輸出用として高い評価を受けましたが、今では北野さんのような趣味で楽しむ人が多く、ブローチやペンダントなどの小物が主流になっています。

城北 七宝焼きに魅せられて
七宝焼き 北野 貞子さん

城北

令和元年 9 月 1 日 現在	
総世帯数	3,687
総人口	7,853
男	3,725
女	4,128

作品は、土台となる形の金属の裏表を丁寧に磨き表面の油を落とし、下地として両面に水で溶いた上薬を塗ります。八百度の電気炉で焼き、冷ました後模様を描きます。それからもう一度焼くという手順で、一日がかりとなります。

焼いた後、塗ったときの色とは異なる色になっているところが魅力だそうです。始めた頃は、講師もいましたが、高齢となり引退されました。講師に言われたとおりにできなかったときも、他の会員のアドバイスのおかげで納得出来る作品になりました。

十人前後で始まったサークルも、高齢となって一人去り二人去り、今は二人だけで月二回の例会です。やめた会員の家族から「もう使わないから」と寄付され増えていく上薬も、もったいないから続けていると話していました。

北野さんは「最近待望の加入者もあり、人数が増えるとう作品の幅も広がり、ますます七宝焼きの魅力も伝えやすい」と喜んでいました。

作品は、ふれ愛まつりにも展示されたり、ご自身のさりげないお洒落に使ったり、お友達に譲ってあげて、喜ばれています。

終戦の日を前に8月9日、城北地区人権啓発推進協議会主催の平和を語る会が行われ、松本市文化財審議委員の原明芳さんによる講演会が開かれました。

戦死者は どう祀られてきたか!



満州事変以降の個人墓碑祀りは昭和14年以降、身分不相応だと禁じられました。出征者は国家のためであつても、自ら望んだものではなかった。そのため、戦死者の慰霊に力を入れ、地域の共同墓地で祀ることになりました。入山辺の、かつての小学校があつた場所にも、兵士の名前を刻んだ長方形の石を組んだ忠魂碑が立っており身近な戦争遺跡です。

明治時代に造られた蟻ヶ崎陸軍墓地は、戦死者増加で手狭になり、跡地として、護国神社の北に美須々陸軍墓地が建てられ現在は松本市が管理し、納骨堂(忠霊殿)では8月に護国神社と遺族会により慰霊祭が行われています。

「戦死者慰霊から平和願望に大きく振幅したが、無念の戦死をした方々のご冥福を祈り、後世に伝えていくのが、現在の我々に与えられた使命だ」と講師は結ばれました。聴講者の一人は「暗い辛い思いだけを残す戦争は、絶対にやっつけてはいけないと改めて感じた」と話していました。

小笠原三代展

県立歴史博物館



深瀬と呼ばれていた松本が『松本』と呼ばれるようになったのは、戦国時代各地を転々としていた小笠原家が徳川時代になって再びかつての深瀬に所領を得て帰った際に、当主小笠原貞慶が、「待つこと久し本懐を遂ぐ」と述懐したことからと伝えられています。(待つ松)(本懐松)

その松本に関係の深い貞慶と父の長時・子の秀政の三代に渡る歴史資料を集めた特別展が千曲市の県立歴史博物館で9月7日から開かれています。

特別展では長時が祈りをささげたと言われる沢村の大日堂の秘仏・大日如来座像も展示されています。

特別展は10月14日までで、この間小笠原家の「知」と「和」について講演会が開かれます。

子どもたちの夏休み

